

第3回 子供たちから見たアメリカの初等教育



米国の留学先が決まり、家族全員で東海岸に移動することになりました。

1986年から2年間のことです。

親たちはそれぞれ自分の仕事で日々落ち込んだり、楽しんだりしていました。

一方、子供たち（小4、小3、2.5歳）はというと、

いきなり言葉の分からない小学校やnursery schoolに放り込まれました。

この時代のアメリカは経済的にもどん底で、社会も荒れていました。

私たちの住居の二筋裏の通りで発砲事件があったとかです。

小学校の先生の給与は低く、真偽のほどはわかりませんが、

スーパーマーケットの店員のそれと同じだとも聞かされました。

国の教育予算も低下しているとも聞きました。

しかし、そんな状況でも、子供たちが体験した、

そして、私たちが覗き見た公立小学校の教育は“素晴らしい”の一言でした。

何より、子供の能力に応じた教育を実践していました。

この公立小学校は大学の近くにあるからか、留学生の子供たちが沢山通っていました。

多国籍小学校です。当然、子供たちの教育背景は多様です。授業は英語です。

最初のころは、子供たちはチンプンカンプンだったでしょう。

しかし、算数の式は共通語です。

子供たちは、ほかの日本人の子供と同様に算数でめきめきと頭角を現し、

日本で味わうことのなかった飛び級を体験しました。

何を英語で言われたのかわからんが、随分褒められたと言っていました。

これが成功体験になったのか、他の教科で出される山盛りの宿題も、

時間がかかって夜中になっても、嬉々としてこなすようになりました。

さらに良かったのが、**小学校のafter school**（日本のクラブ活動）です。
子供たちはチェスを選びました。
学校でのチェスだけでは飽き足らず、
毎週末にボランティアのチェスの先生が自宅に教えに来てくれました。



びっくりしたのが、褒め上手なことでした。
子供たちはめきめきとチェスの腕を上げました。
その先生は子供たちにチェスを教えるだけでなく、親たちのひどい英語も矯正してくれました。
もっとも、こちらは、3分で消える効果でしたが。

渡米時2歳半の子供は年齢下限を下回ってましたが、無事nursery schoolにはいれました。
彼女は、初日から、慣らし保育無しの、
いきなり毎日8時間の米国生活にどっぷり浸かることになりました。
彼女は、何週間も何カ月も言葉を発することなく保育所で過ごしたようです。

しかし、しばらくたったころ、突然話をし始めるようになり、友達もたくさんできました。
ほっとしました。
家の中で子供同士の会話が英語になり、
私たちを置いてきぼりにしたのは1年と少し経った頃のことでしょうか。

4人目の末っ子は米国で生まれ、ベビーシッターに預けました。
米国の保育所は3歳以上でないと預かってくれませんでした。
預かってもらったのは、世が世なら「お姫様」というバングラデシュからの留学生の奥様でした。
パーティで頂いた魚のグリーンペッパー煮込みはおいしかった。
けど、涙が水溜りになるぐらい辛かった！ 🌶️🌶️

その米国生まれの末っ子が米国で最初に発した言葉は、
「まんま」でも、「むにゃい（危ない）」でも、
「かばまんま（分からない）」でもなく、“Mine!!”でした。
アメリカの小学校の先生も保育士さんもチェスの先生も小児科の先生も、
みなさん、子供を褒めるのがとびっきり上手です。

今、子供たちのうちの2組の家族が米国東海岸で暮らしています。
新型コロナの蔓延で心配しましたが、みんな無事です。
いずれの家族の子供たち（私にとっては孫たち）も、米国の良い教育制度のもとで、
自信を持って、落ち込むことなく、生き生きと暮らしているようです。

総勢13人の家族LINEグループは、今日も、太平洋を越えて、賑やかに作動中です。